

「機械を買って
もらいたいのではない。
チームを買って
もらいたいのだ」。

KOMATSU Dump Truck 930E

KOMATSU MINING Hybrid Shovel 2650CX

ハイウェイを降りると、「本道は、地平線までひたすら続いていた。2メートルを超えるサボテンと背の低いブッシュだけが広がっている。空の青色は、東京で見るとよりも、ずっと濃い。風は、乾いていた。アメリカアリゾナ州ツーソン。この一帯は、世界でも有数の鉱山密集地帯だ。400キロ圏内に20を超える銅鉱山が集まっている。

まるで、2頭の恐竜のようだった。巨大な鋼鉄の手が、鋭い爪を土の壁に突き立てる。太い腕を、一気に振り上げる。ひとすくい60トン。突に4トントラック15台分の土をダンプトラックに載せていく。ダンプトラックは、がっしりとした背で土を受け止めると、土煙を上げて走りだした。高さ20メートル近いショベルと積載量3000トンを超えるダンプトラック。どちらが先でも鉱山の仕事は進まないパトナー。だが数ヶ月間で、2台は別の会社の機械であった。

ミルウォーキーに本社を置くジョイクローバル社とトウキョウのコマツ。2つの会社がひとつになり、コマツマイニングがスタートした。いま、文字通りひとつのチームとして仕事に当たっている。「二つになること、弱みはなくなり、強みは何倍にもなりました」。ミルウォーキーから来た女性の責任者が教えてくれた。ジョイクローバル社は超大型掘削機のショベルとともに、地下に横穴を掘っていく「坑内掘り」用の鉱山機械をつくらせてきた。超大型ダンプトラックなどを得意とするコマツとは互いを補うカタチでのパートナーシップになる。

「鉱山機械のすべてをラインナップする」ことになりました。それはつまり、土を掘る、集める、運ぶ、鉱山の仕事のすべてに関わることを意味します。だから、楽しみなんです。息のあった仕事をつづけるショベルとダンプトラックを見つめながら、彼女は微笑んだ。

一台が走り去ると、タイミングよく次のダンプトラックがあらわれた。実は、この鉱山では、GPSによる位置情報をオペレーションセンターで一括管理。次にどこに行けばよいか、ダンプトラックに指示を出している。オーストラリアの鉱山では、すでにダンプトラックの完全無人走行も始まっている。鉱山の現場は、思いのほか「最先端」なのだ。この鉱山でも、ICTによる無人化・自動化が加速していくにちがいない。

オペレーターたちは、地元ツーソン出身の人が多いという。鉱山に常駐するコマツマイニングのメカニックにとっては、彼らと会話を交わすことが重要な仕事のひとつになる。現場の生の声は、メンテナンスに反映されるだけでなく、本社にも届けられた次の開発にフィードバックされていく。「彼らは機械だけを提供しているんじゃない。メカニックを含めたチームを提供しているんですよ」という言葉が、印象的だった。

交代の時刻になったようだ。オペレーターが、10メートル上の運転席から地上へと降りてきた。そして、ショベルの大きな手の、ちようど小指にあたるあたりこそと触れた。まるで働き者の巨大な相棒に「お疲れさま」と語りかけるように。鉱山で働く男と鉱山で働く機械を、アリゾナの太陽が見つめていた。

人のための
道具だから。
社会のための
道具だから。

Global Teamwork
KOMATSU

コマツ
〒117-8414 東京都港区赤坂2-3-6
FAX 03-3505-9862
<https://home.komatsu.jp/>